

新城市若者議会OBOGアンケート調査報告書

調査の概要

○調査期間

2025年1月22日から2月28日まで

○調査対象

若者政策ワーキング及び第1期から第9期若者議会までの若者議会関係者（市内委員、市外委員、メンター市民、メンター職員 計224名）

男女比

全体:224人

男 116人(51.8%)

女 108人(48.2%)

メンター職員:44人

男 24人(54.5%)

女 20人(45.5%)

委員等(メンター職員を除く):180人

男 92人(51.1%)

女 88人(48.9%)

○回収数(男女比)

全体:63人(28.1%)

男:38人(60.3%)

女:25人(39.7%)

メンター職員:15人(34.1%)

男:12人(80.0%)

女:3人(20.0%)

委員等(メンター職員を除く):48人(26.7%)

男:26人(54.2%)

女:22人(45.8%)

○回答者の構成

(期を跨ぐ重複あり、「-」はその期にそのポジションがないことを示す)

	若者政策 ワーキングメ ンバー	市内委員	市外委員	メンター市民	メンター職員
若者政策 ワーキング	5	-	-	-	2
第1期	-	3	-	2	5
第2期	-	7	1	1	2
第3期	-	7	0	4	3
第4期	-	7	0	2	3
第5期	-	1	2	3	5
第6期	-	4	1	3	3
第7期	-	5	2	6	1
第8期	-	6	1	5	1
第9期	-	9	2	5	1

調査結果

本アンケート調査は「Ⅰ. 若者議会参加時の状況」「Ⅱ. 若者議会参加前後での変化」「Ⅲ. 社会に対する意識(全国調査との比較)」「Ⅳ. 居住地について」の4つのセクションに分けて実施した。以下、各セクションの分析結果を記す。

なお、若者議会に参加した市民・若者の実態と市役所庁内の職員の实態とを区別して把握するために、若者政策ワーキングメンバー・市内委員・市外委員・メンター市民(以下、委員等)とメンター職員との回答を適宜分けた分析を行っている。ここでいう「メンター職員」とは、若者議会に初参加する際の肩書がメンター職員であった回答者であり、委員やメンター市民として参加した後、メンター職員として関わっている回答者は除外する。

委員等の回答数は48件、メンター職員の回答数は15件である。

Ⅰ. 若者議会参加時の状況

1. 初参加時の年齢・属性

若者議会に初めて参加した時の年齢(初参加年の4月1日時点)を尋ねたところ、委員等については「15歳」が25%で最も多く、次いで「16歳」の21%、「21歳」の13%、「17歳」の9%となっている(図Ⅰ-1)。

メンター職員については「25歳」が27%で最も多く、次いで「22歳」「24歳」「26歳」の13%となっている(図Ⅰ-2)。

委員等の初参加時の属性については、「高校生・高専生」が58%、次いで「大学生・大学院生・短期大学生・専門学生」が27%、「社会人・一般・その他」が15%となっている(図 I -3)。

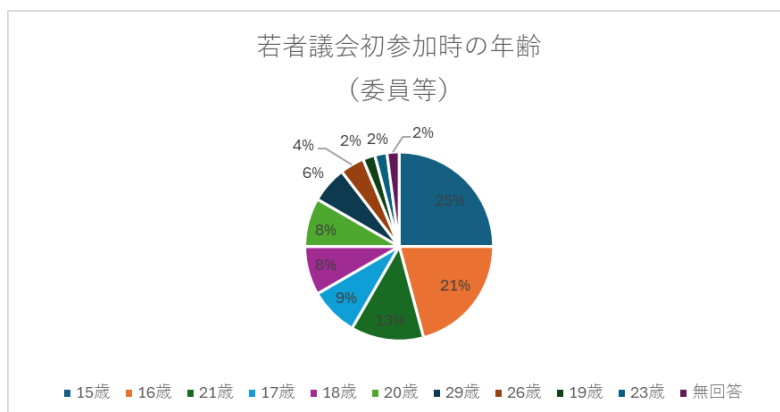


図 I -1 若者議会初参加時の年齢(委員等)

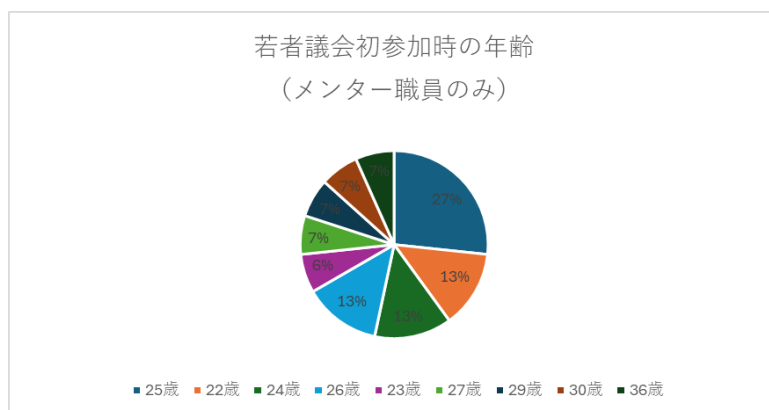


図 I -2 若者議会初参加時の年齢(メンター職員)

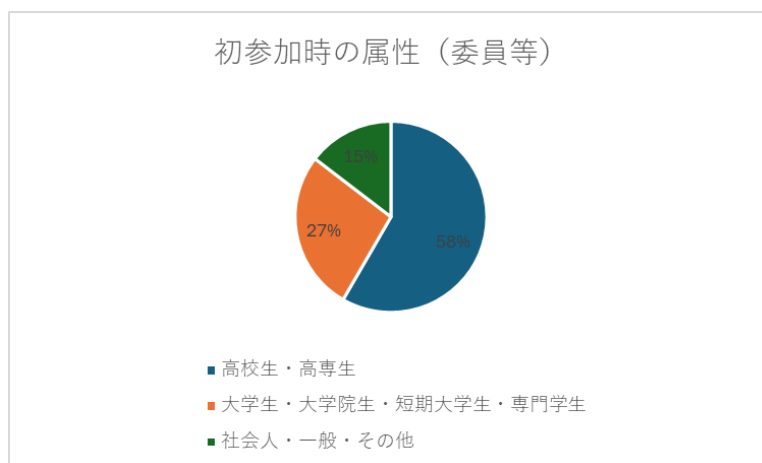


図 I -3 初参加時の属性(委員等)

2. 出身地区

新城市地域自治区別での出身地区を尋ねた結果、委員等では「干郷地区」が最も多く28%、次いで「新城地区」が19%、「新城市外」が17%、「東郷地区」が15%、「鳳来東部地区」が9%となっている(図 I -4)。地区別人口割合は図 I -4(2)の通り(であり、おおむね人口割合を反映し

ている一方、「東郷」と「新城」の割合が逆転しているように、委員の参加には人口以外の要因もあることが考えられる。

メンター職員では、「新城市外」が最も多く46%、次いで「千郷地区」が13%、「八名地区」が13%、「東郷地区」「鳳来東部」「鳳来南部」「鳳来北西部」がそれぞれ7%となっている(図 I -5)。

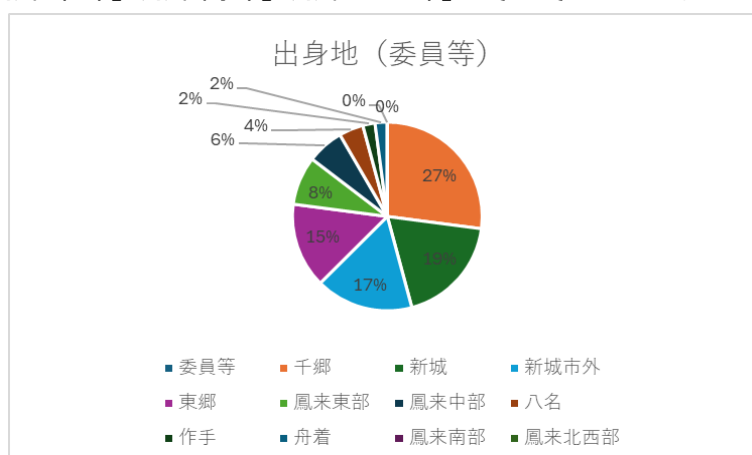


図 I -4 出身地区(委員等)

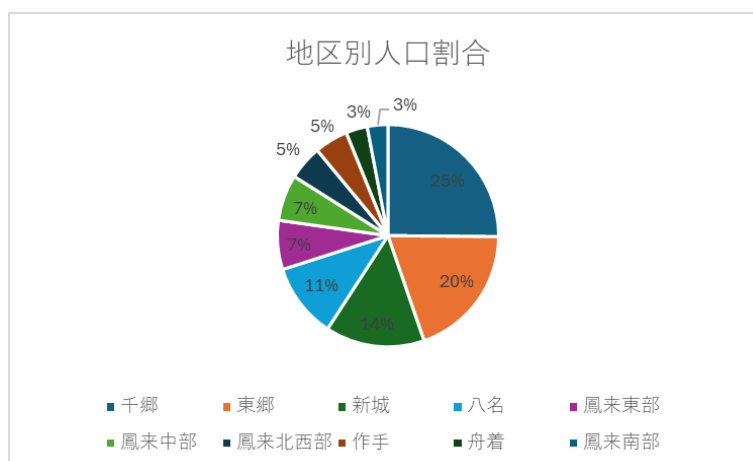


図 I -4(2)地区別人口割合

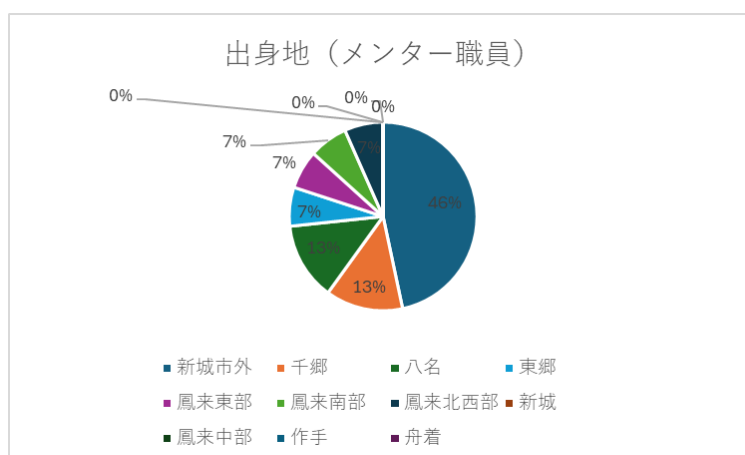


図 I -5 出身地区(メンター職員)

3. 若者議会を知ったきっかけ

若者議会を知ったきっかけについて複数回答可で尋ねた結果、委員等では「友人からの話」が最も多く12件、次いで「ポスター」「募集チラシ」が10件、「家族からの話」「広報誌ほのか」が7件、「学校教員からの話」が5件となっている(図 I -6)。

メンター職員では、「市役所庁内からの話」が最も多く9件、次いで「友人からの話」「立ち上げから携わっていた」が2件となっている(図 I -7)。

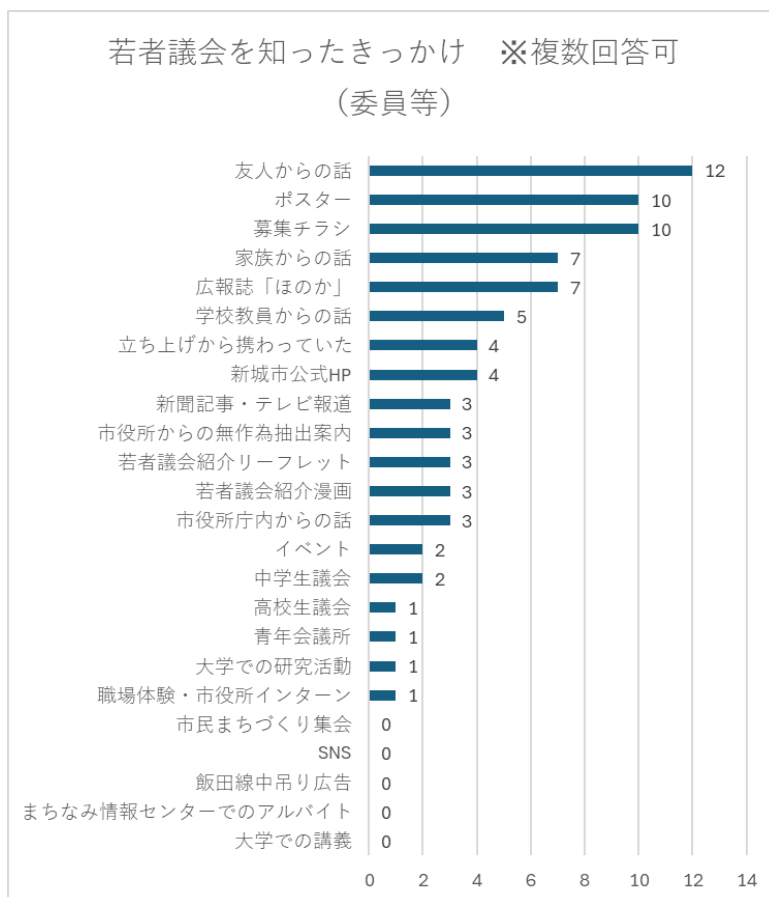


図 I -6 若者議会を知ったきっかけ(委員等)

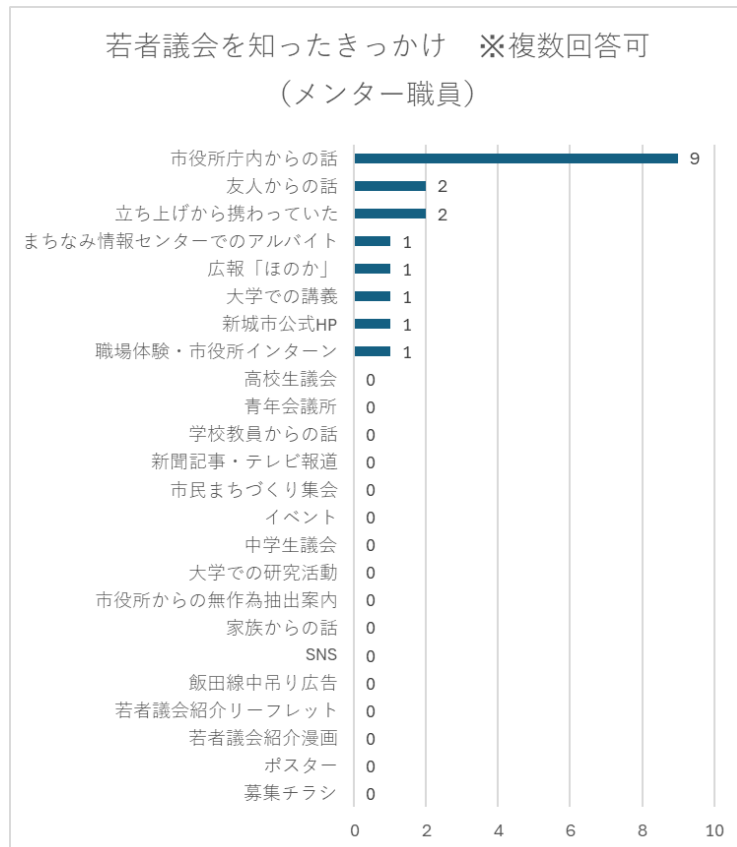


図 I -7 若者議会を知ったきっかけ(メンター職員)

4. 若者議会に参加した理由

若者議会に参加した理由を複数回答可で尋ねた結果、委員等では「まちづくりや地域活動に興味・関心があったから」が最も多く22件、次いで「自分を変えたい、成長したいと思ったから」「新城市を良くしたいと思ったから」が21件、「新城市が好きだから」18件、「家族・友人・知人に誘われたから」が11件、「若者議会そのものに興味・関心があったから」が8件、「報酬があるから」が6件、「若者議会メンバーにあこがれたから」「進学や就活を有利に進めるため」が5件となっている(図 I -8)。

メンター職員では、「市役所庁内で案内があったから」が最も多く11件、次いで「若者議会そのものに興味・関心があったから」が4件、「若者と関わりたい・若者を手助けしたいと思ったから」「まちづくりや地域活動に興味・関心があったから」が3件となっている(図 I -9)。

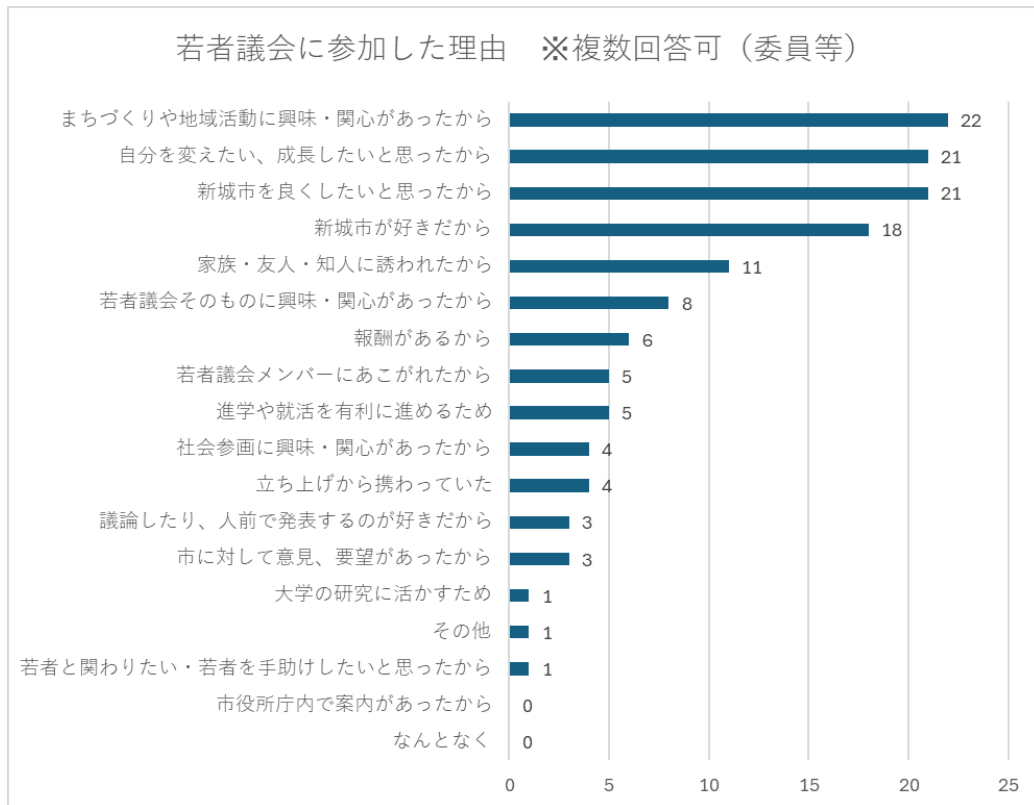


図 I -8 若者議会に参加した理由(委員等)

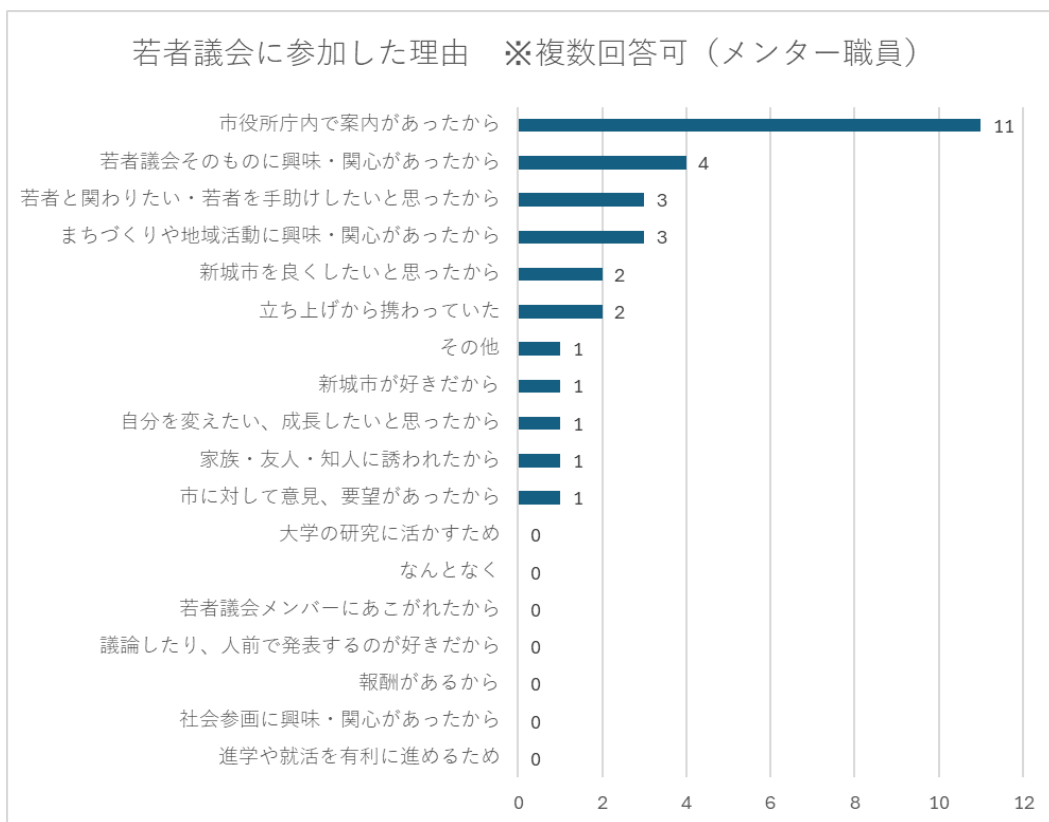
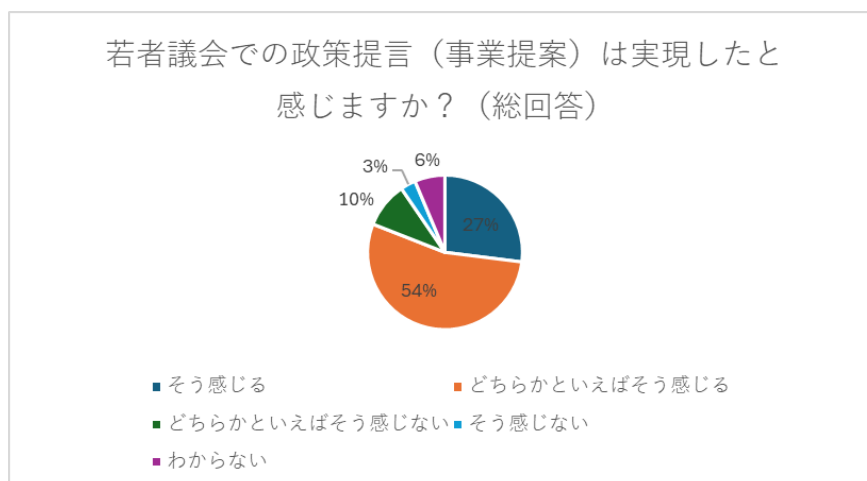


図 I -9 若者議会に参加した理由(メンター職員)

Ⅱ. 若者議会前後での変化

1. 意見反映

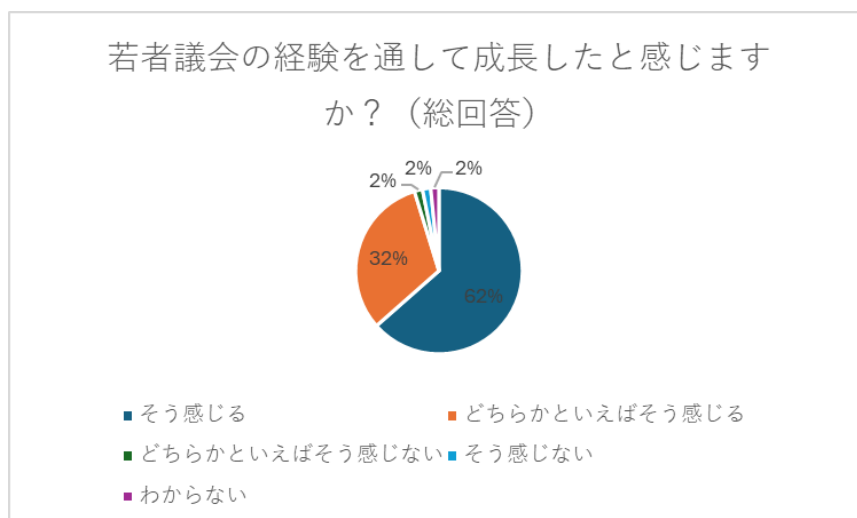
「若者議会での政策提言(事業提案)は実現したと感じますか?」と尋ねた結果、「そう感じる」が27%、「どちらかといえばそう感じる」が54%、「どちらかといえばそう感じない」が10%、「そう感じない」が3%、「わからない」が6%であった(図Ⅱ-1)。



図Ⅱ-1 意見反映に関する所感

2. 学び・成長

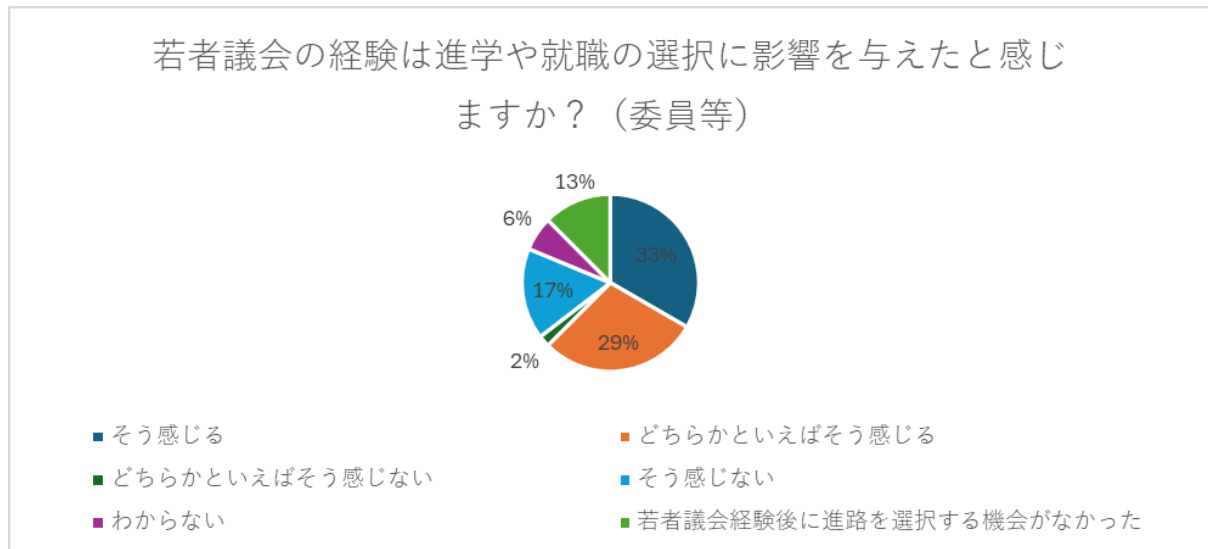
「若者議会の経験を通して成長したと感じますか?」と尋ねた結果、「そう感じる」が62%、「どちらかといえばそう感じる」が32%、「どちらかといえばそう感じない」「そう感じない」「わからない」が2%であった(図Ⅱ-2)。



図Ⅱ-2 学び・成長に関する所感

3. 進路への影響

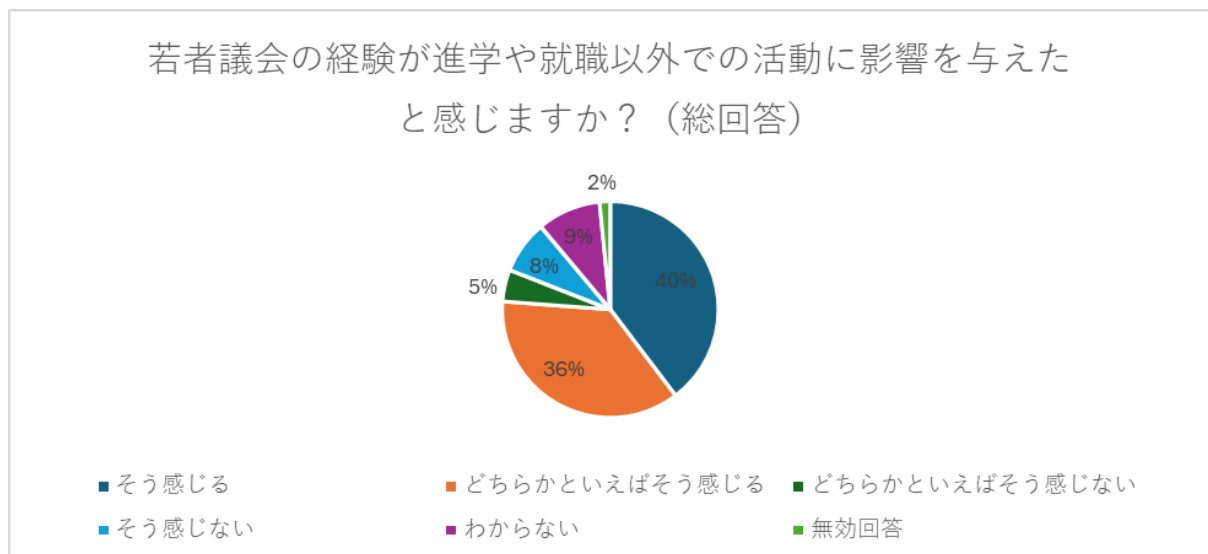
「若者議会の経験は進学や就職の選択に影響を与えたと感じますか？」と尋ねた結果、委員等では、「そう感じる」が33%、「どちらかといえばそう感じる」が29%、「どちらかといえばそう感じない」が2%、「そう感じない」が17%、「わからない」が6%、「若者議会経験後に進路を選択する機会がなかった」が13%であった(図Ⅱ-3)。メンター職員については、市役所への就職後であることが自明なので分析から除外する。



図Ⅱ-3 進路への影響に関する所感

4. 地域活動・その他の活動への影響

「若者議会の経験が進学や就職以外での活動に影響を与えたと感じますか？」と尋ねた結果、「そう感じる」が40%、「どちらかといえばそう感じる」が36%、「どちらかといえばそう感じない」が5%、「そう感じない」が8%、「わからない」が9%であった(図Ⅱ-4)。



図Ⅱ-4 地域活動・その他への活動への影響に対する所感

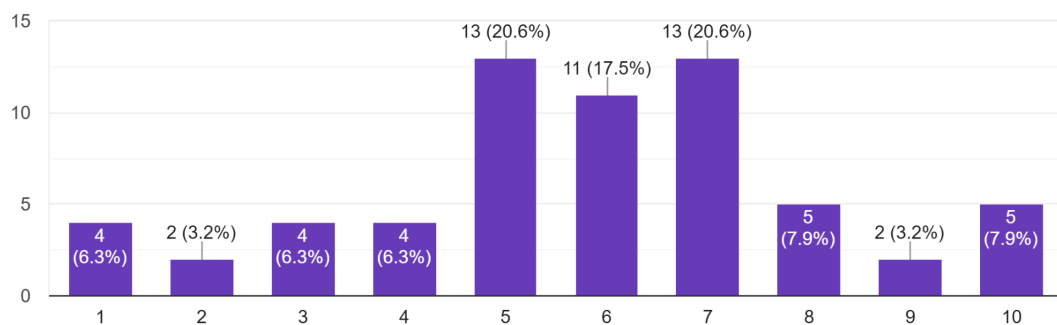
5. 新城市への愛着度

若者議会を経験する前後での新城市への愛着度を1～10点で尋ねた(図Ⅱ-5、図Ⅱ-6)。経験前の平均値は5.8点、最頻値は13件の5点と7点であった。一方、経験後の平均値は8.2点、最頻値は20件の8点であった。経験前後での点数の差分(各解答の経験後の点数から経験前の点数を差し引いた値)の平均値は2.3点、最頻値は15件の0点であった(図Ⅱ-7)。

点数の前後差が0であった回答者の点数の内訳をみたところ、「10点」が最も多く33%を占めていた(図Ⅱ-8)。

若者議会を経験する前の新城市への愛着度を1～10点で教えてください。

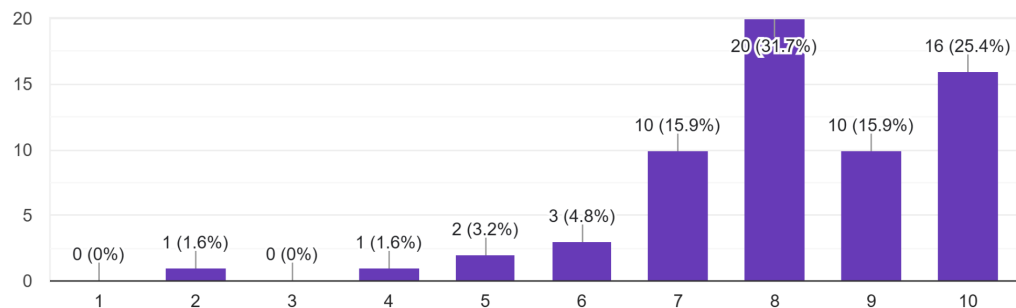
63件の回答



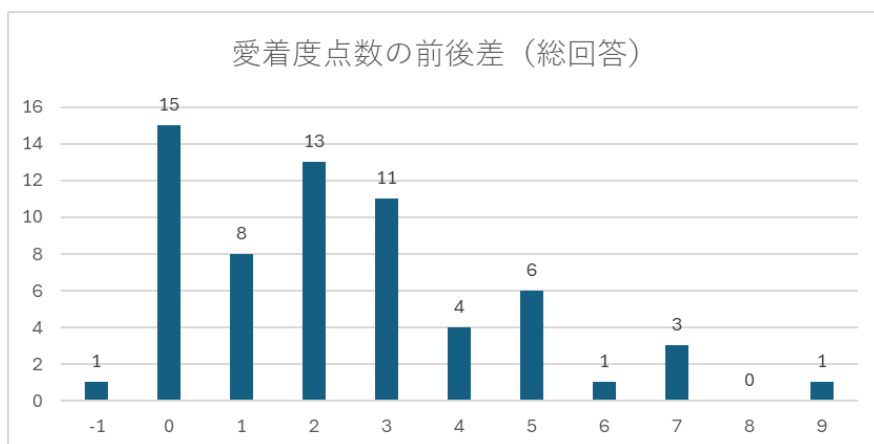
図Ⅱ-5 若者議会経験前の新城市への愛着度

若者議会を経験した後の新城市への愛着度を1～10点で教えてください。

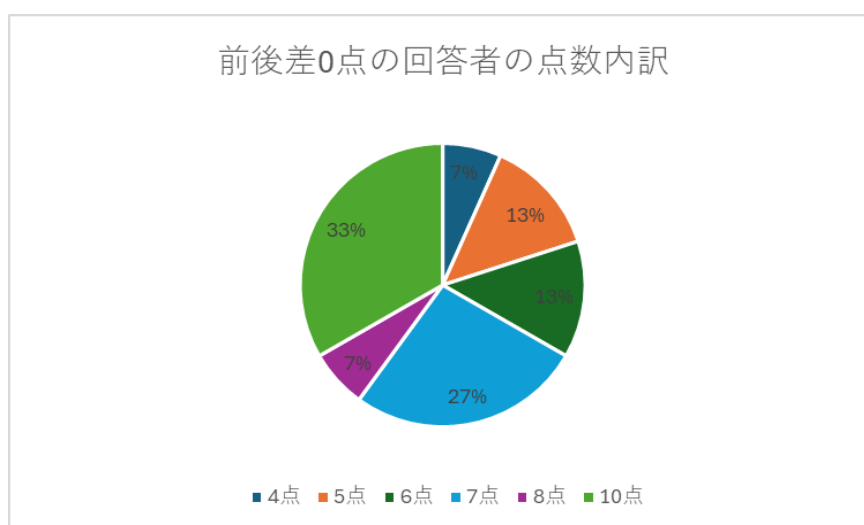
63件の回答



図Ⅱ-6 若者議会経験後の新城市への愛着度



図Ⅱ-7 愛着度点数の前後差

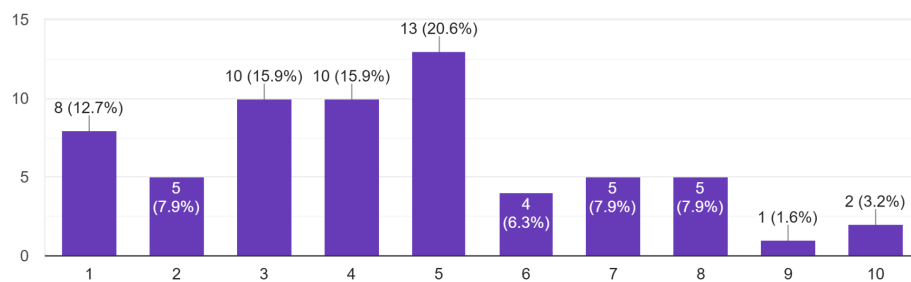


図Ⅱ-8 愛着度点数の前後差が0点であった回答者の点数内訳

6. 新都市の事業・まちづくりへの関心度

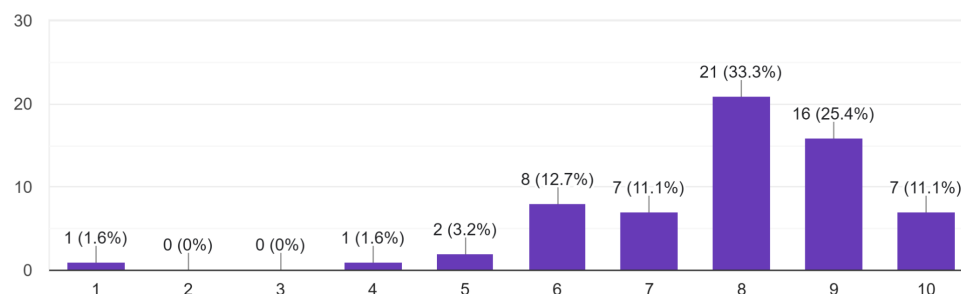
若者議会を経験する前後での市の事業やまちづくりへの関心度を1～10点で尋ねた(図Ⅱ-9、図Ⅱ-10)。経験前の平均値は4.5点、最頻値は13件の5点であった。一方、経験後の平均値は7.8点、最頻値は21件の8点であった。経験前後での点数の差分の平均値は3.4点、最頻値は10件の3点であった(図Ⅱ-11)。

若者議会を経験する前の市の事業やまちづくりへの関心度を1～10点で教えてください。
63件の回答

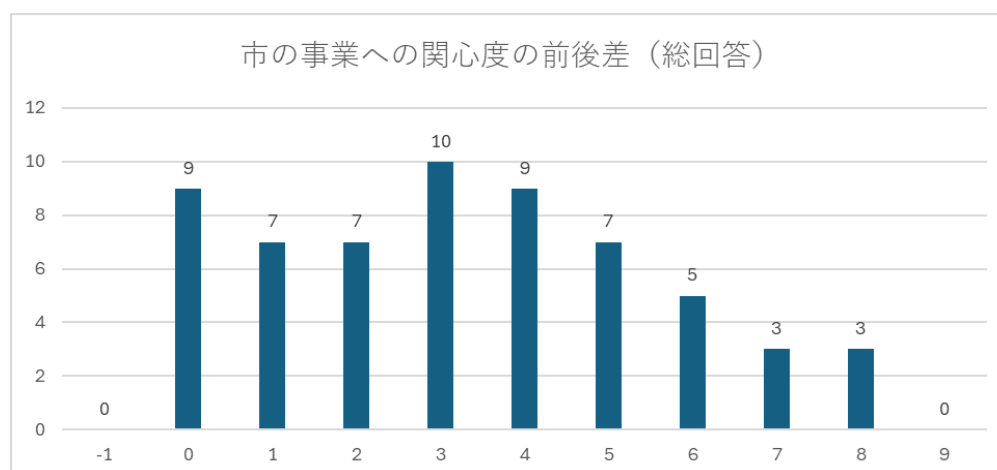


図Ⅱ-9 若者議会経験前の市の事業やまちづくりへの関心度

若者議会を経験した後の市の事業やまちづくりへの関心度を1～10点で教えてください。
63件の回答



図Ⅱ-10 若者議会経験後の市の事業やまちづくりへの関心度

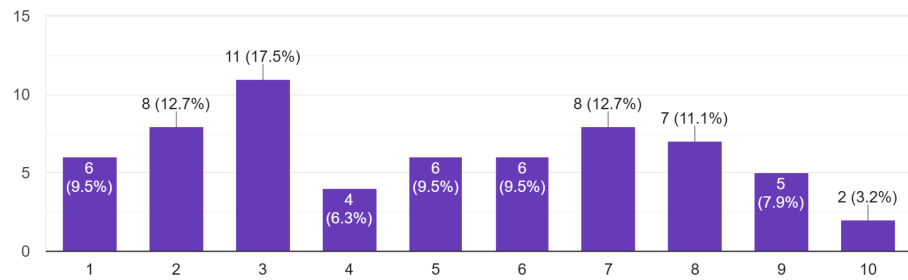


図Ⅱ-11 市の事業やまちづくりへの関心度の前後差

7. 政治への関心度

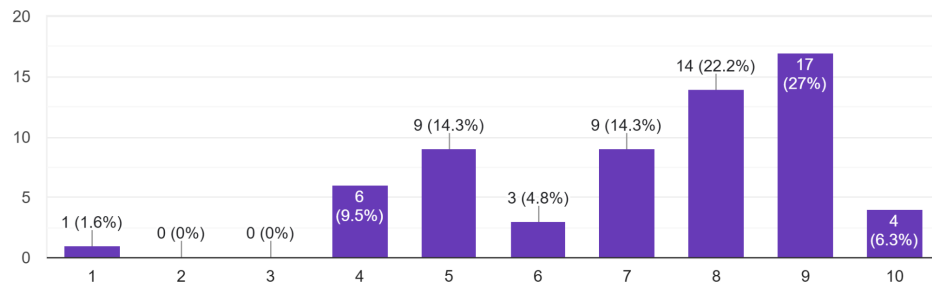
若者議会を経験する前後での政治への関心度を1～10点で尋ねた(図Ⅱ-12、図Ⅱ-13)。経験前の平均値は5.0点、最頻値は11件の3点であった。一方、経験後の平均値は7.2点、最頻値は17件の9点であった。経験前後での点数の差分(各解答の経験後の点数から経験前の点数を差し引いた値)の平均値は2.3点、最頻値は15件の4点と6点であった(図Ⅱ-14)。

若者議会を経験する前の政治への関心度を1～10点で教えてください。
63件の回答

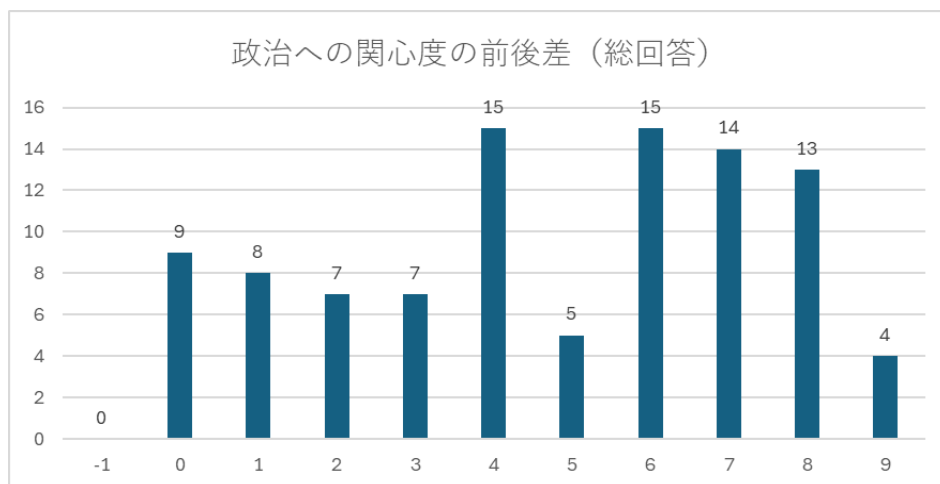


図Ⅱ-12 若者議会経験前の政治への関心度

若者議会を経験した後の政治への関心度を1～10点で教えてください。
63件の回答



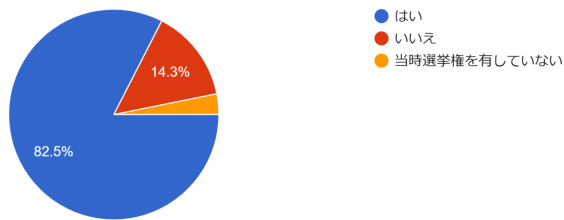
図Ⅱ-13 若者議会経験後の政治への関心度



図Ⅱ-14 政治への関心度の前後差

「2024年10月に行われた衆議院選挙に投票しましたか？」と尋ねた結果、「投票した」が82.5%、「投票していない」が14.3%、「当時選挙権を有していない」が3.2%であった（図Ⅱ-15）。同選挙における全国の10代の投票率が43.2%、20代の投票率が36.5%である（総務省より）ことから、全国と比べても高い投票率であることがみてとれる。

2024年10月に行われた衆議院選挙には投票しましたか？
63件の回答



図Ⅱ-15 投票率(2024年10月衆議院選挙)

Ⅲ. 社会に対する意識(全国調査との比較)

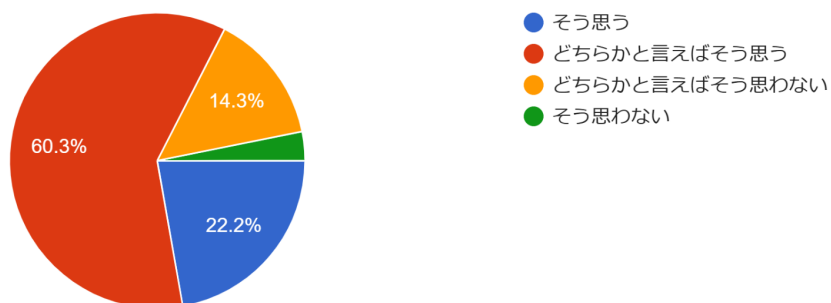
1. 社会貢献・地域貢献

「日本の未来を良くするために何か行動しようと思っていますか？」という質問に対して、「そう思う」が22.2%、「どちらかと言えばそう思う」が60.3%、「どちらかと言えばそう思わない」が14.3%、「そう思わない」が3.2%であった(図Ⅲ-1)。

「具体的に何を通じて社会のために役に立ちたいと考えていますか？」という質問に対しては、「自分の職業を通して」が最も多く69.8%、次いで「町内会などの地域活動、交通安全に関する活動」が22.2%、「国際交流」が20.6%、「体育・スポーツ・文化に関する活動」が14.3%となっている(図Ⅲ-2)。

全国調査(内閣府『子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)』)と比較すると、「町内会などの地域活動」、「国際交流」、「農山漁村での活動」「家事や子どもの養育、保健等に関する活動」に特に関心が寄せられていることがみてとれる。

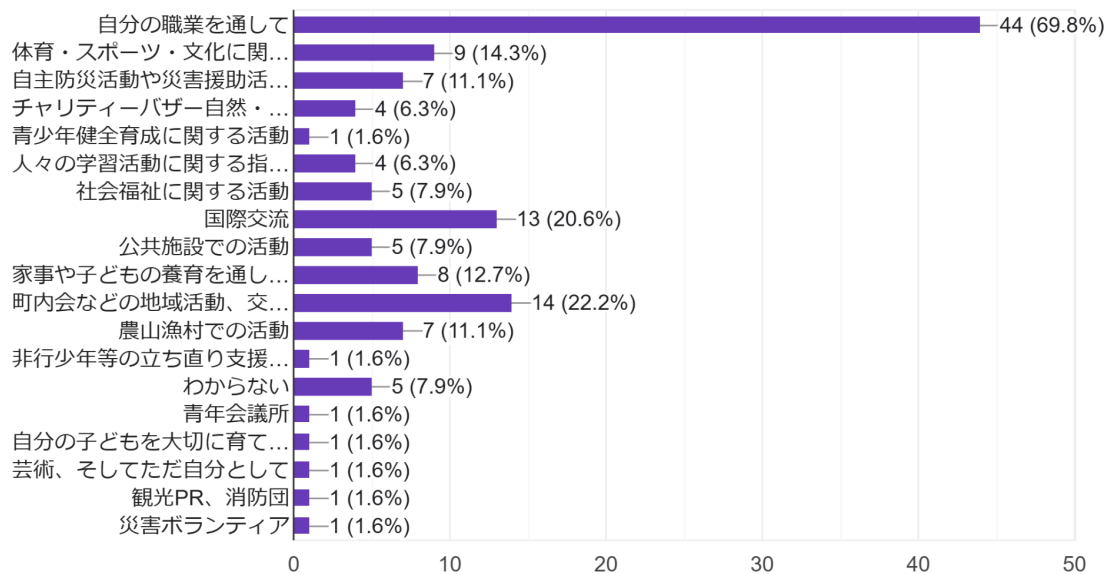
日本の未来を良くするために何か行動しようと思っていますか？
63件の回答



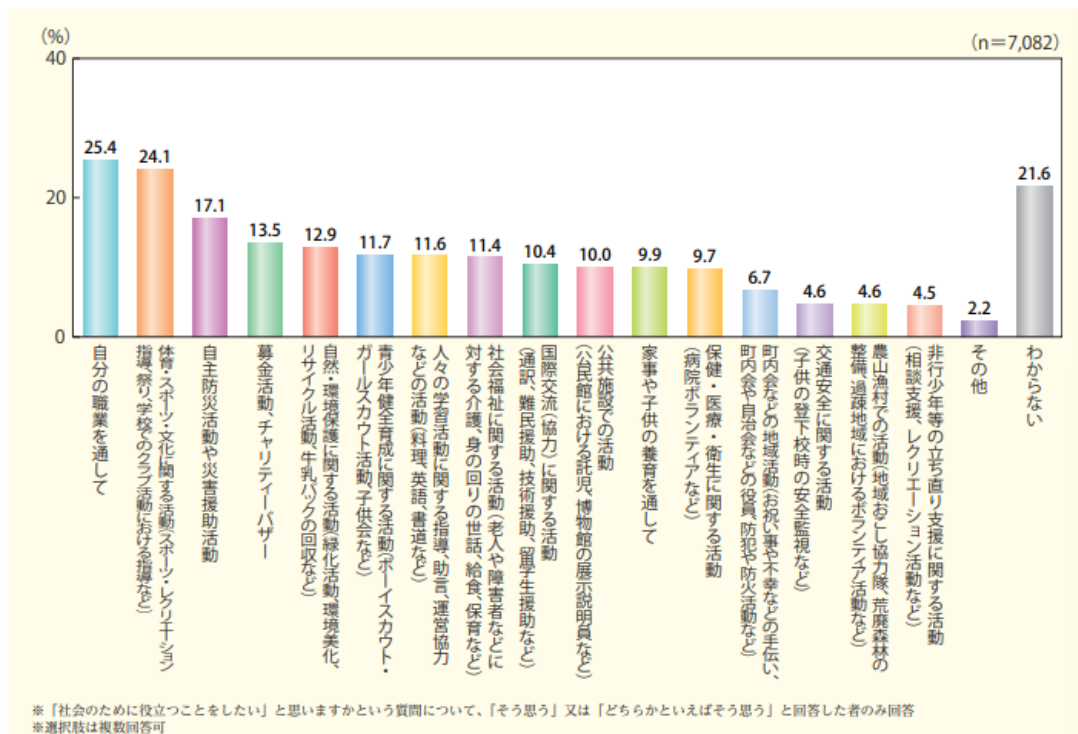
図Ⅲ-1 社会貢献への意識調査

具体的に何を通じて社会のために役に立ちたいと考えていますか？

63 件の回答



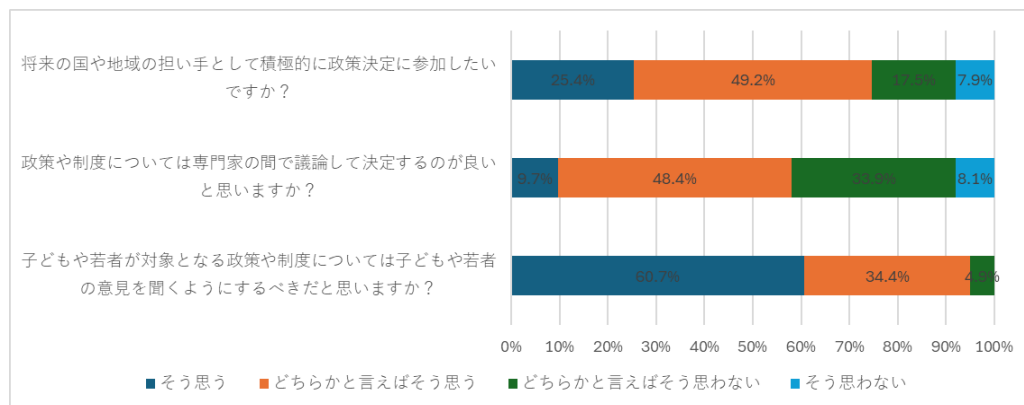
図Ⅲ-2 社会貢献の具体的な方法



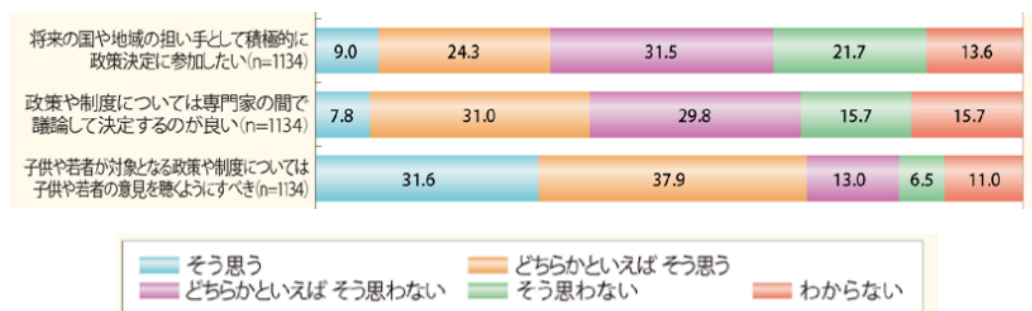
参考:内閣府「子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)」

2. 政策決定過程への関与

政策決定過程への関与についての質問では、どの項目でも「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合が全国調査（内閣府）よりも高く、「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したいですか？」に対しては74.6%、「政策や制度については専門家の間で議論して決定するのが良いと思いますか？」に対しては58.1%、「子どもや若者が対象となる政策や制度については子どもや若者の意見を聞くようにするべきだと思いますか？」に対しては95.1%が肯定的に答えた（図Ⅲ-3）。



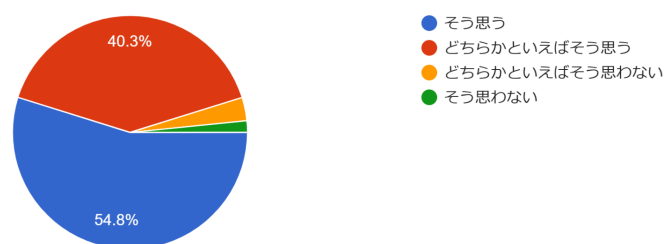
図Ⅲ-3 政策決定過程への関与に関する意識調査



参考：内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」

「子どもや若者の意見を聞く仕組みとして『若者議会』のような仕組みは必要だと思いますか？」という質問に対しては、「そう思う」が54.8%、「どちらかといえばそう思う」が40.3%、「どちらかといえばそう思わない」が3.2%、「そう思わない」が1.6%であった（図Ⅲ-4）。

子どもや若者の意見を聞く仕組みとして「若者議会」のような仕組みは必要だと思いますか？
62件の回答



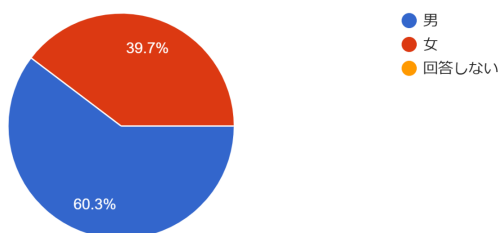
図Ⅲ-4 若者議会に対する意識調査

IV. OB・OGの属性

1. 性別

性別について尋ねたところ、「男」が60.3%、「女」が39.7%であった(図Ⅳ-1)。うち、委員等では「男」が54%、「女」が46%であった。委員等の母数の男女比は「男」51.4%、「女」48.6%であることから、男性の回答率が若干高くなっている。

性別を教えてください
63件の回答



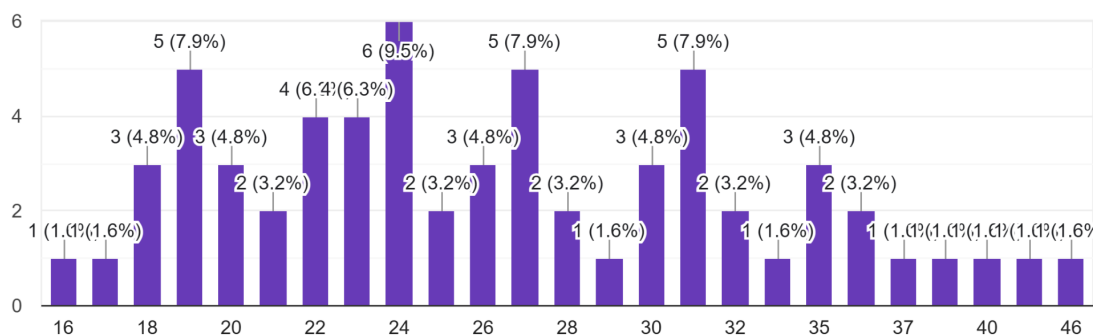
図Ⅳ-1 性別

2. 年齢

現在(調査期間時点)の年齢について尋ねたところ、平均値は「26.6歳」、最頻値は6名の「24歳」、最小値は「16歳」、最大値は「46歳」となっている(図Ⅳ-2)。

現在の年齢を教えてください※半角数字のみ(21歳の場合:21)

63件の回答



図Ⅳ-2 調査期間時点での年齢

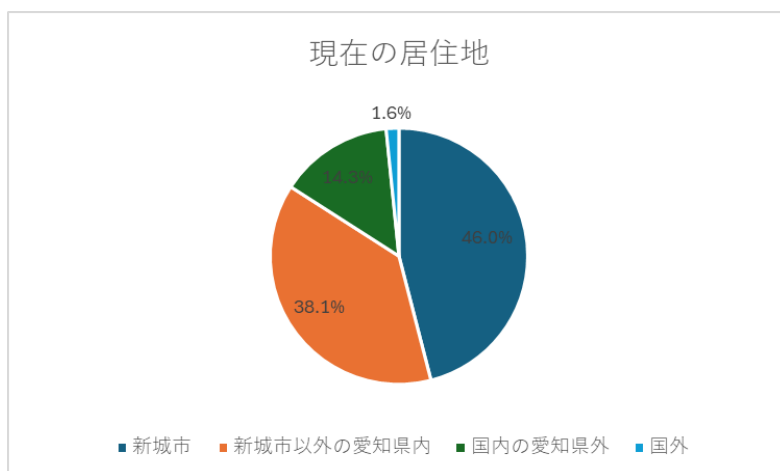
3. 居住地

調査期間時点の居住地について尋ねた結果、「新城市」が46%、「新城市以外の愛知県内」が38.1%、「国内の愛知県外」が14.3%、「国外」が1.6%であった(図Ⅳ-3)。

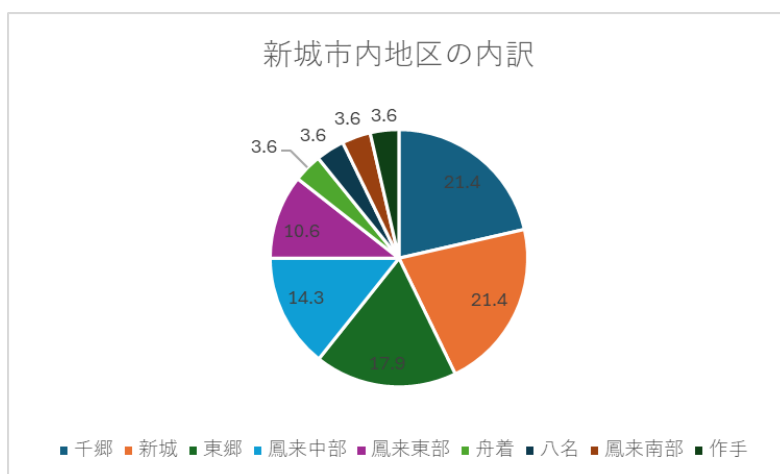
。

新城市の地区の内訳は「千郷」「新城」が21.4%、「東郷」が17.9%、「鳳来中部」が14.3%、「鳳来東部」が10.6%、「舟着」「八名」「鳳来南部」「作手」が3.6%であった(図Ⅳ-4)。

新城市以外の愛知県内の内訳は「豊川市」が9名、「名古屋市」が5名、「刈谷市」が2名、「その他」が6名であった。国内の愛知県外の内訳は「南関東」が4名、「東北」「北関東」「東海」「近畿」が1名であった。



図IV-3 調査期間時点での居住地

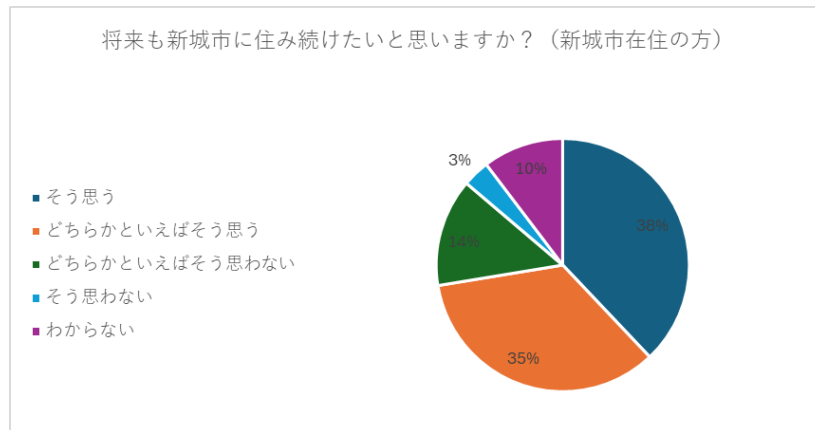


図IV-4 新城市内地区の内訳

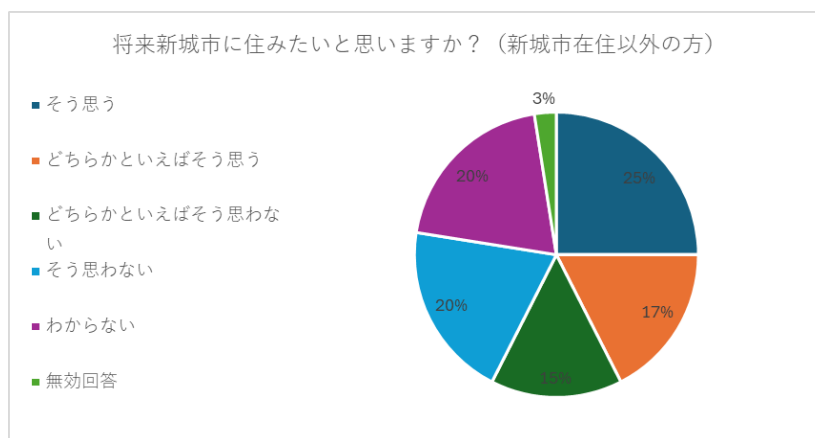
4. 新城市への居住希望

現在の居住地が新城市である方に「将来も新城市に住み続けたいと思いますか？」と尋ねたところ、「そう思う」が37.9%、「どちらかといえばそう思う」が34.5%、「どちらかといえばそう思わない」が13.8%、「そう思わない」が3.4%、「わからない」が10.3%だった(図IV-5)。

一方で、現在の居住地が新城市以外の方に「将来は新城市に住みたいと思いますか？」と尋ねたところ、「そう思う」が25%、「どちらかといえばそう思う」が17.5%、「どちらかといえばそう思わない」が15%、「そう思わない」が20%、「わからない」が20%であった(図IV-6)。



図IV-5 新城市への居住希望（市内在住）



図IV-6 新城市への居住希望（市外在住）

調査分析

I. 本調査から明らかになったこと

1. ・初参加時の委員等の年齢は、高校1年生時、高校2年生時が約半数を占める。
2. ・初参加時のメンター職員の年齢は20代前半が半数を占めることから、新人研修の要素も兼ね備えていると伺える。
3. ・出身地区はおおむね人口比を反映させているものの、人口比以外の要因（情報伝達の流れ、市役所からの距離等）も参加者の決定に影響していることが考えられる。
4. ・若者議会を知ったきっかけは、「友人からの話」、「家族からの話」、「学校教員からの話」など人伝手が大きいに影響している。一方で「ポスター」、「募集チラシ」、「広報ほのか」など、市が打ち出している宣伝媒体も若者議会を知るきっかけとして作用していることもわかる。
5. ・メンター職員はほとんどが市役所庁内からの案内から若者議会を知っている。
6. ・若者議会に参加した理由は、「まちづくりや地域活動に興味・関心があったから」「新城市を良くしたいと思ったから」「新城市が好きだから」といったように、市に対する意識、モチベーションを持った者が参加する傾向にある。一方で、「自分を変えたい、成長したいと思ったから」も参加の大きな動機のひとつになっている。「家族・友人・知人に誘われたか

ら」といった外からの要因もある。また、市内外問わず「若者議会そのものに興味・関心があったから」という層もいる。

7. 「若者議会での政策提言は実現したと感じますか？」に対しては、肯定的な回答（「そう感じる」「どちらかといえばそう感じる」）が8割を占めていた。
8. 「提案された事業の実施はされたものの、実現に若者が携わっていない」「実施後の報告、継続がないものもある」といったように、事業の実施にいたるまでは満足しているものの、その後の対応に課題がみられるといった声が多くみられる。
9. 「若者議会の経験を通して成長したと感じますか？」に対しては、肯定的な回答が9割を超えていた。
10. 「若者議会の経験は進学や就職の選択に影響を与えたと感じますか？」に対しては、肯定的な回答が6割を占めていた。
11. 「若者議会の経験が進学や就職以外での活動に影響を与えたと感じますか？」に対しては、肯定的な回答が7割を超えていた。
12. 「新城市への愛着度」については、前後差0の回答者が多く、その内訳も高い点数が多くを占めていることから、若者議会を通して新城市への愛着度が高まるのではなく、もともと新城市へ愛着のある人が若者議会に参加する傾向にあることがわかる。
13. 一方で、「新城市の事業・まちづくりへの関心度」「政治への関心度」は若者議会参加前後で顕著な正の変化がみられる。
14. 2024年10月に行われた衆議院議員選挙の投票率については82.5%であり、全国の同世代の若者と比較しても高い割合であることがみてとれる。
15. 「具体的に何を通じて社会のために役に立ちたいと考えていますか？」という質問に対しては、「町内会などの地域活動、交通安全に関する活動」、「国際交流」、「農山漁村での活動」、「家事や子どもの養育、保健等に関する活動」が全国比較において高い割合を示している。
16. 政策決定過程への関与に関する質問では、「積極的に政策決定に参加したい」、「子どもや若者が対象となる政策については子どもや若者の意見を聞くべき」と考える割合が全国よりも高い。
17. 一方で、「政策や制度については専門家の間で議論して決定するのがよい」と考える割合も全国より高い。
18. 子どもや若者の意見を聞く仕組みとして、若者議会のような仕組みが必要だと感じる割合は95%を占めていた。
19. 新城市に住んでいる人で将来も新城市に住み続けたいと考えている人は7割程度であった。
20. 一方で、新城市に住んでいない人で将来新城市に住みたいと考えている人は4割程度であった。
21. 「新城市に住みたい」と回答する理由には「自然が豊か」「落ち着いてる」「新城市の人が好きだから」「程よい田舎具合で好きだから」「圧倒的ホーム感」といった安心感・愛着といった感情的要因を挙げていることが多いが、一方で「住みたくない」と回答する理由には「職場がない」「就職先に困りそうだから」「都会へ出て経験を積みたい」「今住んでいるところに利便性を感じる為」「感情を抜きにした中で、税金のかかり方、インフラの整備等居住するメリットがないため」といった利便性や経済的な問題といった現実的要因が多く挙げられている。

Ⅱ. 考察

○自己成長としての機会

若者議会を通して成長を感じているメンバーが9割を超えていた。理由として、「人前で話すことが苦でなくなった」「発表の機会になれるようになった」「意見を言ったり、人前で話す度胸がついた」といった発表する・意見を伝える力の向上や、「アンケート調査や会議での決議、メンバーの意見を聞きながら意見をまとめられるようになった」「全体をみる力が養われた」「意見を認めたり相手のことを知ろうとする力がみについた」など他者と強調しながら意見を集約する力の向上が挙げられる。

若者議会に参加した理由も「自分を変えたい、成長したいと思ったから」が2番目に多い回答になっている。これらのことから、若者議会は、参加する若者にとって自己を変え、成長する機会として大いに機能していることが推察される。

この経験は、その後の進学や就職の経験にも生きており、「面接官に対して、緊張せずありのままに話すことができた」「大学受験の自己推薦の場で有意に影響を与えた」といった声も上がっている。

○「まちが好き」から「まちをつくる主体者」へ

若者議会に参加する若者には、「もともと新城市が好き」という傾向がある。参加理由に「新城市が好きだから」と選ぶ若者が多いこと、市に対する愛着度について高い数値で参加前後に変化がみられないことからこのことがいえる。

一方で、まちづくりや社会参画に対する積極性は若者議会を通して向上していることが見受けられる。まちづくりや地域活動に興味関心があり若者議会に参加した者たちも、参加後には市の事業や政治への関心度がさらに高まっているといえる。若者議会の経験が地域活動へ影響を与えたと感じているメンバーも7割を超えており、「地域のイベント事に積極的に参加するようになった」「選挙なども行くべきだと思えるようになった」「様々な会議体への参加のきっかけとなった」といった声もある。また、選挙での投票率や社会貢献、政治関与に対する姿勢などの質問への回答も、同種の全国調査よりも高い割合が示されている。

これらのことから、若者議会への参加は「まちが好きな若者」から「まちに関心を持ち、まちづくりに参画する若者」へと変化を促すきっかけになっているといえる。

○地域へ広がる若者議会

若者議会を知ったきっかけについて、「ポスター」「募集チラシ」「広報誌ほのか」等の市の広報によるものも多いが、それ以外にも「友人からの話」「家族からの話」「学校職員からの話」といった周囲からの伝聞も多く挙げられていた。このことから、若者議会の取り組みは人づてに広がっていることがみてとれる。若者議会に参加した理由についても、「若者議会そのものに興味・関心があったから」という声が一定数挙がっていた。

設立当時、全国では珍しい条例によって制定された若者議会として注目を集めてきたが、その取り組みがこうして広がっていることから、若者議会はある程度の評価がされているといえる。

「子どもや若者の意見を聞く取り組みとして『若者議会』のような仕組みは必要だと思いますか」という質問に対しても、肯定的な意見が95%を超えていることから、若者議会を通して活動に意義や価値を感じたメンバーが、その取り組みをさらに広げていくことが期待される。

添付資料(自由記述の回答一覧)

「若者議会での政策提言(事業提案)は実現したと感じますか？」への回答に対する理由(自由記述)。

そう感じる

- 農業委員会で答申したパンフレットが完成したため。
- 実際に予算がついて図書館がリノベーションされたから。
- 情報センターがリノベーションされたから。
- 翌年に事業実施できたため。
- C&H事業は数年に渡って政策実現できているため

どちらかといえばそう感じる

- 自分たちが納得して作り上げて提言はするが、自分たちが望んだようにうまく物事が運ぶことばかりではないので
- 事業提案を行い、実行されているケースや実績として国内で注目されたり全国的なメディアの露出など果たしたから
- 若者議会だけでなく、市の政策でも進められていた分野だったため、変化が感じられたんだと思う。
- 政策によりまちまちな部分が多い。政策をどこまで形にするかで事業提案が本当に委員がやりたい形で実現できているのかまた実施する側がいいように捉えて委員の思い出はない方向へ行ってしまった政策もあるのではないかな。また政策を実施する側もいいわいいわで乗り気じゃなくなるとなってしまうケースや担当の押し付け合いがあるのかも知れない。
- 実際に事業が行われた結果があるから
- 事業の継続されていないものもあるため。
- 提案した政策は実現はしている(実現した後の活動は不明瞭)
- 実際身の回りが変化したから
- メンバーと色々な意見を出し合った上で企画の方向性や分類分けができ、話し合いがしやすい、話が理解しやすい環境だったからだと思います。
- 事業提案自体は次年度実現しているが、その後の継続性は、提言内容によってまちまち。
- 形になっているから
- 事業報告がないから

どちらかといえばそう感じない

- 実現はしたものの、実際にその政策をつくりあげた若者がその実現にほとんど携わっていないから。
- 自身を含めて、関わった事業の、その後のフォローアップが充分できていないため
- 実施はしたが、想いが入っていると感じない部分もあるため。
- 市としてできるものに最終的に落とし込まれていったという側面が強かったと感じたから

そう感じない

- 提案した政策に関心や責任感を持って取り組むことができず、理解度が浅いまま進めたばかりに、中途半端に終わらせてしまった。私が関わった政策の場合、実質稼働可能な委員が自身含め二人だけで、ふるさと納税を増やしたいという課題に対して実際に行ったのはウェブサイトの更新ぐらいの記憶である。効果確認もPDCAも回せなかったため、とてもじゃないが貢献できたとは思っていない。多くの人の目に止めるインスタを運営するという案もあった気もするが、私がSNSに興味がなく、乗り気になれなかった。(連盟加入後も活動を継続するというのも、就活や学業を言い訳にして頓挫した。)この政策に関しては大人が考えた""若者を利用した""戦略、戦術を実行しても良いと感じる。

わからない
(回答無し)

「若者議会の経験を通して成長したと感じますか？」への回答に対する理由(自由記述)。

そう感じる

- 自分の得意な部分に気付いて、自分により自信が持てるようになった。また、人の優しさに触れられて自分も柔らかくなった様に思う。
- 若い市民の方で、新城市のことを真剣に考えて実際の政策を検討しているということに刺激を受け、職員として前向きな姿勢で物事に取り組めた。
- 人前で話すことや、人と意見交換をすることは苦ではなくなったため
- 知らなかったことを知ること、政策に携わらせてもらうこと、異年齢の人と関わること、勉強になりました。
- 自分でも成長を感じたがとくにメンターをやっていると色んな子が変わったなと感じる瞬間がわかる。逆に成長を探せるそんなメンターが増えて欲しい。
- 普段携わることのない内容を経験できたため
- 人前で話す時にアガリにくくなったと感じるため
- 様々な世代の人と関わることで、意見を認めたり相手のことを知ろうとする力が身についたと感じたから
- 人前で話すことが本当に苦手だったのですが、委員長や会議で知り合ったばかりのメンバーや市役所の方と話したり、市長答申をしたりと人前で話すことが増え、苦手な気持ちが無くなり自信を持って話せるようになりました！
- 市役所の方と議論する機会に恵まれたため
- 実際に予算を申請して、使い方を考える経験を高校生でできたことはとても大きな価値になりました。
- 発表の機会に慣れるようになりました。
- 自分の性格が少し外交的になった
- 議会での話し方や会議の進め方などが今の活動に活きる事柄が多いため。
- 「様々な人と関わる」、「多くの人の前で話す」、「自分の考えをいかにわかりやすく伝えるか」などを街中でのアンケート調査や議会での決議、またメンバーの意見を聞きながら自分の考えをまとめる、など若者議会での活動を通じて経験でき、成長できたと思います。
- 話し合いの進め方など、人を見ていただけでもとても参考になる。
- 自分の意見を言ったり、人前で話す度胸がついた

どちらかといえばそう感じる

- 若者議会のみなさんと一緒に、何かをつくりあげる経験が貴重であるから。
- 私はメンター職員でありましたが、市の実情や財政面のことに当時はあまり関与することなくいました。しかし、実際に若者と市の税金を使う側としての立場となった際に、真剣に事業について考え学びました。ここをきっかけに財務のことであったりに興味を持ったのでそのような面で成長できたと感じました。
- 様々な人たちと関わることでできたから
- 実感はないが、活動を行っている以上何かしらの変化はあったはず。
- 特にファシリテーションについて経験・学ぶことができました。
- 物事に対し俯瞰して捉えるようになった他、全体をみる力が養われた

どちらかといえばそう感じない
(回答無し)

そう感じない
(回答無し)

わからない

- 全国各所で地域活性の活動を実施しているので、比較的ノウハウの共有や委員の支援が中心だったため

「若者議会の経験は進学や就職の選択に影響を与えたと感じますか？」への回答に対する理由
(自由記述)。

そう感じる

- 就職面接での話のネタになった
- 新城市役所への就職を検討し実際に内定をいただき、キャリア選択の幅を持たせることができたため
- 初対面の面接官に対して、緊張せずありのままに話すことができたから
- 今は新城市の行政職員として働いているが、若者議会に参加していなかったら市役所とは縁がなかったように思うから。
- 大学入試の際に若者議会のことを記載したら、たまたま訪問した東京大学の先生の目に留まって、入学することができた。
- 大学受験の自己推薦の場で有意に影響を与えたと思っています。

どちらかといえばそう感じる

- 若者議会をきっかけに地方の経済活性化に興味を持ち大学進学し、就職にあたっても地域や行政の手助けができる仕事を選ぶようになりました。
- 1年間考えたものが実績となっている

どちらかといえばそう感じない

- 大学の志望校が変わらなかったため

そう感じない

- もともと自分の一番やりたいことは若者議会と直接の繋がりはないもので、若者議会を経験してもそれは変わらなかったから。
- 元々、希望進路があったため
- 専門職へ就職したため。
- 工学系で就職したかったため
- 現在高校2年のためまだわからない

わからない

- 下の子達をみていると若者議会って大学等ではめちゃくちゃ評価されたり頑張りが認められる団体なんだと思った。自分も大学ワンチャン入れたのか!?!と常々思う

若者議会経験後に進路を選択する機会がなかった

- 他の仕事にも興味はあるが、転職せず現状維持に留まっている。
- メンター職員のため

「若者議会の経験がその後の自分に影響を与えたと感じることがあれば教えてください。」に対する回答(自由記述)。

- 地域のイベント事に積極的に、運営者としても来場者としても参加するようになった。

- 政治などに興味は湧くようになり、選挙なども行くべきだと素直に思えるようになった。
- 様々な会議体への参加のきっかけとなった。
- 司会者において事前の準備や話の組み方が最も重要かつ、議事録やまとめの大切さを感じた。市の代表という姿勢を意識するようになった
- 相手の意見を頭ごなしに否定する人を見たおかげで、こうなっちゃいけないなあ〜と思った。年齢、学校レベル関係なく様々な人と関わることの面白さも知りました。
- 大学選びに直結した
- 現在、別の市に在住していますが他自治体の活動に興味関心が強くなり積極的に参加しています。また自分の仕事で地域を良くしたいという気持ちを持ちました。
- 普通に生活しては話すことない世代(自身が大学生時の高校生、30代など)の方との話すことが出来たため、ほかの世代との交流をすることが出来た
- 初対面の人と話す時に気まずくならず、笑顔で話を途切れさせない会話が出来るようになったこと。目の前で困っている人やトラブルが起きた時に、躊躇せず声をかけて助けることが出来るようになった。
-
- 自分に自身がついた
- 進学先
- 会議の際に、俯瞰してものごとを見れるようになった
- 大学の進路を地域政策学部にしたのは若者議会の影響が大きいと思う
- 対人関係における積極性が身についた
- 社会活動家的な人と話す機会が増えた
- 若者議会の任期終了後、市や地域の何かしらの役員への誘いが少し増えたかと思います？
- 自分の意見を積極的に伝えていくことが出来るようになった
- 友達家族意外と話したり交流したりすることで話す力がつき、就職先では接客業、転職先でも人事職に就いたこと
- オンラインでの話し方が学べた
- 人の意見そのままではなく、要点を把握することが出来るようになり、聖徳太子レベルでの聴き取り能力とまとめながら書きとる力がついた
- あまり関わることのない年代(歳下)と関わることができた為、それまではきつい言い方しかできなかったが伝え方の工夫ができるようになった。
- 人生が変わった。周りがちょこっと優しくなった。
- 社会は人の力で動いているんだなあという意識。アンケートやインタビューなど微力ながらできることややってみたいことをキャッチすること。市外に出かけるばかりでなく、市内のイベントや活動にアンテナが向くようになったこと。お世話になった方に今でもご挨拶できることへの感謝。
- 年代において、主軸になる価値観が違うことがわかった。正しいことの基準も多様であることがわかった。
- 会議等での司会に自信がもてた
- 市役所内での他課との調整の仕方が少しわかったように感じる。
- 若者議会で当時の話し合いの3つの約束事であった、自分ばかり話さない、相手を否定しない、楽しく気軽に話そう、ということは、今でも話し合いの大事なことだと信条だと思っています。また、自分が参加したワークショップ等では、なるべく参加者みんなが話し合いできるような雰囲気づくりを心がけています。

「将来は新城市に住みたいと思いますか？（「新城市在住」以外の方）」への回答に対する理由（自由記述）。

そう思う

- 老後はゆっくり自然いっぱい新城で過ごしたいから
- 地元で恩返しをしたいと考えているため。
- 故郷だから
- 圧倒的ホーム感、安心感、人のあったかさ、自然の豊かさ、愛着
- 今はスキルアップの段階で新城でやりたいことがあるから。
- 新城が大好きだから。家族がいるから。自然豊かで人の優しい地域で子育てがしたいから。

どちらかといえばそう思う

- やはり、新城の文化や雰囲気、馴染み深く愛着があるため、できれば次世代の担い手でありたいとは思っているため
- 新城の自然が好きだから。ただし働く場所のこととかを考えると難しいとも思う。

どちらかといえばそう思わない

- 職場が新城市にないため
- 都会の方へ出て経験を積みたいから
- 経験したことの無い場所に住みたいため
- 新城市に知り合いがそこまで多くないため

そう思わない

- 利便性や市民に対する補助を考えると豊川、豊橋の方が勝る。田舎に住みたいなら豊根村の方が良い。
- 働く所がない。将来新城がなくなっていそうで心配。新城に住みたい明確な理由がない。
- 豊川市に家があるから
- 若者議会とあまり関係していないが、消防団活動等地元地区のため自身の人生を削るようなものが多く、田舎であるため参加しないと村八分に近い目に合わされるため。
- 既に現在の地域で家を買っているため
- 感情を抜きにした中で、税金のかかり方、用途、インフラの整備等居住するメリットがないため。
- 今住んでいるところに利便性や愛着を感じているため。

わからない

- フルリモートのできる仕事があれば帰ってもいいかな～と思っています。

「将来も新城市に住み続けたいと思いますか？（「新城市在住」の方）」への回答に対する理由（自由記述）。

そう思う

- 程よい田舎具合で好きだし、東京と大阪の真ん中にあり、名古屋への交通手段(高速バス)もあっていろんなところへ行きやすいから
- 居宅を建てたため
- 職員であり、また、家族で住む家も市内に建てたため

どちらかといえばそう思う

- 新城市、特に新城市の人が、好きだから。また、私の新たな居場所として受け入れてくれて、恩を感じているから。迷う理由は、自分の将来したい様々なことが新城に住んでできることなのかまだわからないから。
- 自然が豊か、落ち着いているから
- 子どもの数によっては移住した方が良いのかもしれないと感じることもある

どちらかといえばそう思わない

- 新城市での進路、就職先が不明瞭でおそらく大学の所在地で就職するため
- 就職先に困りそうだから

そう思わない

- 家業や地域とのつながりがあるため。

わからない

- 仕事次第。子育ての際は帰ってきたいと思う。

出典

総務省「国政選挙における年代別投票率について」

https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/

内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 特集1 日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～」

<https://www.aiina.jp/uploaded/attachment/2292.pdf>

内閣府「子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)」令和2年7月

<https://www.aiina.jp/uploaded/attachment/2292.pdf>

若者議会OB・OGインタビュー調査結果概略報告書

○調査期間

2024年12月末から2014年5月初まで

○調査対象

連盟の行った若者議会経験者らへのアンケート回答者のうち、より詳細なインタビューに応じることに同意を得た29人（内訳：若者議会委員・同市外委員・同メンター計24名、若者議会事務局経験の市職員3名、若者議会の設立・運営等に助言を得た学識者2名）。

○調査方法

上記29名にオンラインで個々面談の形で行い、内容の要約を若者議会連盟および担当課と共有することの同意を得て記録された。個別の内容については容易に個人が特定される可能性があるため、本報告では全体の概略にとどめている。

○実施者

調査にあたっては、インタビュアーを若者議会創設時の市長であった穂積亮次氏に依頼し、協力を得た。以下の概略報告は同氏によるものである。

○概略報告

・若者条例を再確認

若者議会の設置を定めた「新城市若者条例（平成27年施行）」では、市民が主役のまちづくりに若者が参加し、若者の意見が反映する仕組みをつくること、また若者自身もその責任を自覚してまちづくりに主体的にかかわることをもって、若者が活躍するまちの形成をめざすことが謳われています。それは市民を主役に世代のリレーができるまちをつくるとの、自治基本条例の目的にそった施策であることが確認されています。

・若者政策がめざしたもの

若者政策は、若者世代を市民自治の仲間として意識的に受け入れ、また若者自身もその一員として自覚を持って関わることで、市民自治社会の力を高めながら、それを次の世代にも受け継いでいこうとするものです。

・若者総合政策と若者議会

この目標に向かって進むために、条例は市に若者総合政策の制定を義務づけており（「若者が活躍するまちの形成の推進に関する施策を総合的かつ計画的に実施するための計画」第8条）、若者議会がこの若者総合政策の策定と実施に関する事項を市長に答申する役割を負うことになっています。

・若者政策ワーキングの提案

若者総合政策として文書化されたものは、平成27年に若者政策ワーキングがまとめたパンフレットがあり、指針やテーマ、目標等が記載されていますが、市としての若者総合政策は必ずしも体系化されているわけではありません。

・若者総合政策の実例

若者議会は、あらかじめ体系的に制定された若者総合政策をもって始まったわけではありませんが、若者議会で議論され事業提案されてきたもの、あるいはさまざまな制約から予算事業化にはいたらなかったが意欲的に追及されたもの、これら全体が若者総合政策の実例集としての役割を負っていることになります。

・若者議会検証の2つの視点

若者議会10年の成果と課題をどう総括すべきか。2つの視点が必要と思います。第1は、自治の担い手として若者を意識的に迎え入れ、その成長を後押しし、世代のリレーを促進することに、いかなる貢献を果たしたのか、という視点です。第2は、若者議会から提案され、政策化・予算化された諸事業が、まちづくり全体にいかなる新しい効果をもたらしたのか、という視点です。

・若者議会の大きな成果

第1の視点では、若者議会が大きな役割を果たしてきたことは、多くの人が認めるところでしょう。若者議会連盟によるアンケートやインタビューでは、実際に参加した若者たちの声が記録されています。また、市議会や市役所、地域の自治組織などで、若者議会の経験者が活躍している様子も見られます。防災の会のように、若者議会をきっかけに生まれた活動が今も続いている例もあります。さらに、進学先や就職先、居住地域などで、積極的に公共のために貢献する若者がおり、彼らはそれが若者議会経験をバックボーンにしたものだと答えています。

・若者議会を動かしたもの

これらの成果は、若者議会の運営プロセスや実際活動に大きなエネルギーが注ぎ込まれ、多様なステークホルダーの協力、市議会および市職員のサポートが結びついたことによるものでした。

・より多くの若者にチャンス

それだけにこの機会利益に、より多くの若者層がアクセスできる仕組みづくりが必要との声が聞かれています。若者議会への参加機会の提供にとどまらず、より多様な形での若者活躍の場の創出などです。

・外部機関との連携

また若者議会参加者が高校生が中心になり、それ以外の年齢層や社会層の参加が少ないことに留意する意見も多く聞かれました。地元大学や企業との積極的な連携・協力の手法開発が待たれています。

・第2の検証視点

若者議会総括の第2の視点については、評価が定まっていません。インタビューでも、この面は十分に検証されているとは言えないとの声が多く聞かれました。

・評価基準と手法

これには多くの要因があると思われます。1)評価指標(基準)が定まっていない。2)より長期視点での評価が必要である。3)個々の事業規模は小さく、定量的な効果測定は困難である。4)若者議会の主な役割は政策答申で、実施プロセスや結果検証へのかかわりは限られている。等々が挙げられます。

・市民満足度

とはいえこの現状にとどまらず、若者議会が果たした(果たしている、果たそうとしている)事業効果を検証し、評価する作業は不可欠なものと思えます。若者政策への市民満足度を高め、市議会からのチェックに応え、参加する若者自身の自覚を高め、政策推進にあたる市役所業務を改善することにつながるからです。

・市としての評価

若者総合政策の策定は市の責務であること、若者議会の事業提案は市長に対する答申で、その実施は市の事業であることを踏まえると、この問題については市からの応答が肝要になります。

・若者政策の可能性

この点で、若者議会の業務を担当した職員へのインタビューからは、重要な示唆を得ました。1)若者議会から提案された事業の意義が評価され、市の担当部署の事務事業として引き継がれた事例が生まれている(避難所運営のワークショップ、高校生向け企業ガイダンスの発行、プレコンセプションケアなど)。2)先端コンテンツ活用など、若者感度からの提案を受け止めきれずに機会を逃したケースがある。3)若者議会で議論されながらテーマが大きく、予算事業にはできなかったが、意見書等の政策提言としてまとめ、積み上げていく価値があるものがある(医療政策など)。4)庁内調整に手間取り、効果的に実施できなかったことがある。5)若者総合政策をもっと重視すべきだった。等が指摘されています。

・可能性をくみ取る感度

若者議会に由来するテーマ設定や政策提言が持つ社会的意義や将来価値をくみ取り、まちづくりに活かすことが、「若者が活躍するまち」の実現につながるだろうこと、またそのためには担当部署を越えた市の総合力が求められることも指摘されています。

・若者総合政策の位置づけ

若者総合政策はそれをプログラミングしたものでしょうが、それが単独であるよりも、市の総合計画や各部の事業計画、自治区の地域計画などに関連づけられていけば、さらに強力なものになることも指摘されています。

・政策実施と運営をめぐって

若者議会が諮問機関として規定されていること、および1年任期制をとっていることから、その役割が政策提案(予算建議)に集中していることに対しては、さまざまな意見が上がりま

した。1)今の形でよい。2)任期を2年とし、1年目を政策づくりに、2年目をその実施関与にあてる。3)諮問機関としての若者議会とは別に政策実施の実行組織を設置する。4)予算枠を持った若者議会にこだわらず、参加のハードルの低い活動場所をつくる。などの考え方が出されました。またふるさと納税を活用した予算枠の確保や拡充の提案もありました。

・若者の声を形に

全体を振り返って、若者議会の経験者や担当職員、有識者が共通して強調しているのは、「若者が公共の場で意見を言い、それがきちんと検討されて、実際の形にできるしくみがあること」の意義は揺るぎない、ということでした。

・若者議会連盟

これに加えて若者議会連盟の存在は特筆されると思います。任意の緩やかなネットワークですが、このようなつながりを生み出したことも、若者政策の成果と特徴であろうと思います。今回の検証作業自体が若者議会連盟の存在なくしては不可能でした。

・市職員の役割

また若者議会の活躍に果たした事務局担当者をはじめとした市職員の役割の大きさも、再三にわたって言及されました。彼らの適切なサポートがなければ若者議会がまとめた成果を出すことはできなかっただろうことが、インタビューに答えてくれたメンバーから共通して聞かれたことでした。「市民が主役のまちづくり」は、市職員がどのような役割を果たすことで実現されるか。そのモデルケースとなっています。

・1000万円の予算枠について

新城市若者議会を特徴づける大きな柱ですが、さまざまな意見がありました。税金を扱うことが、公共領域に関わることへの自覚と責任につながる効果は間違いないものの、実施政策の評価測定の難しさも伴って共通理解をつくるにはいたっていません。若者総合政策の熟度や若者議会の今後のあり方ともつながって、市としての判断であろうと思います。

以上